

いたくらは

2022
08

ITAKURA
HOUSE

特集

産地とつなぐ板倉最前線 南関東・静岡の 家づくり

- 1 神流町・神流川森林組合〈群馬〉
- 2 藤本工務店〈神奈川〉
- 3 トレカーサ工事〈神奈川〉
- 4 ケンセイHome〈静岡〉
- 5 こころ現代民家研究所〈静岡〉
- 6 ちば山真重舎〈千葉〉
- 7 石井工業〈千葉〉
- 8 ミナクニ・コンサルタント〈東京〉

連載

板倉自由自在 「ゲストハウス 古民家 江口屋」

板倉小屋百景 「八郷の板倉小屋」

世界板倉遺産 「浅間山北麓の板倉」



特集

産地とつなぐ板倉最前線

南関東・静岡の家づくり

- 01 **case 1** 山と大工、つながることで活かし合う
神流町・神流川森林組合 (群馬)
- 08 **case 2** 若い世代にも無理なく届く、
本物の伝統構法にこだわる 藤本工務店 (神奈川)
- 10 **case 3** 家も暮らしもナチュラルスタイルに
トレカーサ工事 (神奈川)
- 12 **case 4** 大工が惚れた板倉造りの家
ケンセイHome (静岡)
- 14 **case 5** 景色や風をとりこむ、里山になじむ家
こころ現代民家研究所 (静岡)
- 16 **case 6** 焼マツ杭と自然素材とワークショップで
建てる小屋 ちば山真童舎 (千葉)
- 18 **case 7** 自然と共に生きる幸せ。
木づくりの暮らしを満喫中 石井工業 (千葉)
- 21 **case 8** コンストラクション・マネジメント方式が広げる、
板倉建築の可能性 ミナクニ・コンサルタント (東京)

板倉自由自在 Renovation of ITAKURA

- 25 築100年を越える古民家を板倉で再生。
観光の要となる宿泊施設に
「ゲストハウス 古民家 江口屋」(茨城県かすみがうら市)

板倉小屋百景

- 30 茅葺きの民家に寄り添う、現代技術を備えた板倉の離れ
「八郷の板倉小屋」(茨城県石岡市)

板倉に住む 第5回 産地にスギ材を選びに行った家づくり。

客人も驚く板倉の快適さを、暮らしの中で実感。

- 34 板倉を彩る暮らしのコラム 「日本の木のおもちゃ」と「木の床」と。
「遊びこむ」ことが、子どもを育む

世界板倉遺産 第7回

- 36 「浅間山北麓の板倉」
- 41 「流山さんたろ」の室内温熱環境
- 47 板倉の家は私達がつくります

COVER STORY

伝える板倉



「神流川森林組合
職員住宅」

群馬県神流町に建つ森林組合員用の板倉の住宅。地元のスギをふんだんに使い、伝統構法の技術継承に取り組み大工志塾によって建てられた。山と大工をつなぎ、技を伝える一役を担った。



「八郷の板倉小屋」

地域再生拠点として活用されている茅葺き民家の離れとして建てられた板倉の小屋。伝統的な母屋に対して、ソーラーパネルや給電・放電の設備を搭載させ、新技術との融合を試みた。

写真2点/齋藤さだむ

神流川に沿って開けた群馬県神流町。両岸には1000メートル級の山が迫る。町は神流川森林組合の職員住宅を板倉構法で建てた。

特集

産地とつながる
板倉最前線

南関東・静岡の家づくり

case 1

南関東・静岡の板倉

山と大工、 つながることで活かし合う

かなまち

神流町・神流川森林組合（群馬県多野郡神流町）

群馬県の南西部に位置する神流町は、林業を主幹産業とする山間の町。この町に毎年2回、全国から若者が集結します。大工を育成する大工志塾が、町産材を使い研修を行っているのです。この取り組みを通して、山と大工が密につながることの相乗効果が見えてきました。

取材・文／平山友子 撮影／齋藤さだむ



上・下／森林組合の敷地内に建つ職員住宅は2戸1の長屋。入居は単身者2世帯を想定している。使用した木材はすべて神流町産。南面、深く出した軒の下は広々としたポーチ。目隠しの格子が軽快なリズムを刻んでいる。設計は藤本工務店の藤本嶺さん。

良材の魅力を引き出す伝統構法、
技術伝承に活かされる神流の木



ロフトがついた、ゆったりとした1DKの間取り。北側の窓からは神流川の清流と対岸の山々を望める。

東面の外観。屋根材は三州瓦。町ではこのような板倉の公営住宅を増やしていく方針だ。移住促進の効果も見込んでいる。

DATA

「神流川森林組合職員住宅」
所在地／群馬県多野郡神流町
構造／木造・平屋
敷地面積／474.77㎡
建築面積／107.54㎡
延床面積／97.72㎡
設計／大工志の会・藤本嶺
施工／神流木造建築
竣工／2022年2月

≫主な材

柱・梁・板材／スギ(神流町産材)
断熱材／スタイロフォーム厚
45mm(床・天井)
外部建具／木製建具(玄関)、
アルミサッシ(その他)

≫主な仕上げ

屋根／いぶし和瓦葺き
外壁／スギ本実板厚30mm、縦木ずり
24mm 羽目板鉋張り仕上げ
天井・内壁・床／スギ本実板厚30mm

≫主な設備

冷暖房／エアコン、薪ストーブ
給湯／ガス給湯器

CONTACT INFORMATION

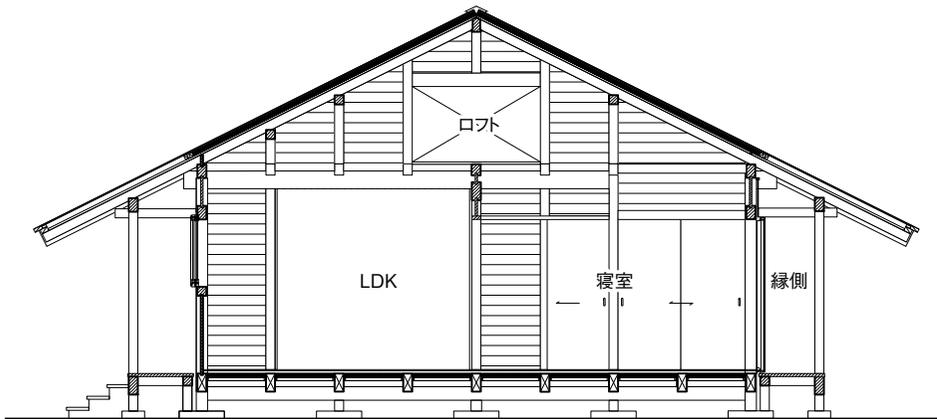
神流川森林組合
群馬県多野郡神流町麻生92
tel.0274-57-2140
[http://www.kannamachi.jp/
~kannagawa/](http://www.kannamachi.jp/~kannagawa/)





実践で身につける、伝統木造の手技

- 1 建方風景。17人の大工志塾の塾生が、指導棟梁の指揮の下で機敏に動き回る。各人の役割分担が自ずとできている。
- 2 右中／青い絆纏を着ているのが、大工育成塾出身の指導講師。この現場には7人いる。その上に統括指導棟梁と副統括指導棟梁2人がいる。
- 3 棟が上がり、感慨深げに見上げる塾生と指導者達。昭和、平成、令和の三世代の大工が協働し、技を伝えていく。
- 4 最初は不揃いだった掛矢の音も、声を出して息を合わせていくとピタリと揃ってくる。仲間との共同作業はかけがえのない経験だ。
- 5 指導講師として指揮する藤本嶺さん。大工志塾が開講して以来ずっと神流町に関わっている。自社で使用する木材も調達している。
- 6 コンクリートを極力使わず、基礎は石場立てとした。礎石には神流町の名産品である三波石を使用している。



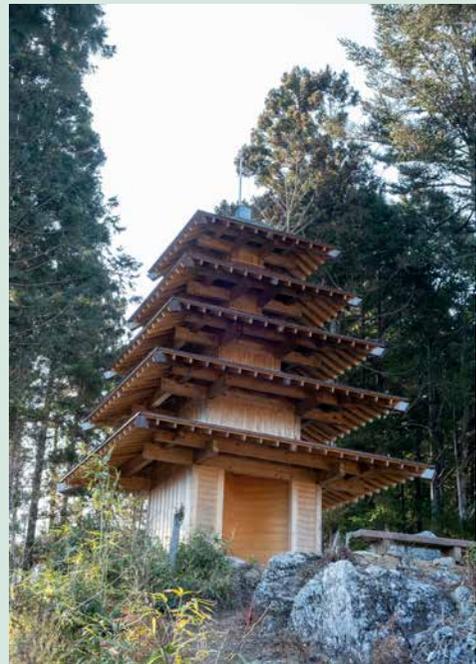
立面図1/100

伝統木造建築構法を 次世代に伝える大工志塾

大工志塾は国土交通省が支援し、一般財団法人住宅産業研修財団が運営する国家プロジェクトだ。前身は大工育成塾。日本の伝統木造建築構法を次世代に継ぐことを目的としている。工務店の社員である塾生達は、居住地に近い場所で月1回の座学を受ける（福島・東京・名古屋・大阪・福岡・金沢・長野の7教室）。それに加え、神流町で年2回の実技研修を行っている。全国から集まる塾生が合宿をしてひとつの課題に取り組む。ここで出会う仲間が一生の宝となるのは、大工育成塾からの伝統だ。卒業した若い大工達は全国の仲間と連絡を取り合い、情報交換や仕事の融通をし合っている。同期の仲間と協同で工務店を設立した例もある。

実技研修で指導するのはベテランの棟梁に加え、大工育成塾を卒業した若手棟梁達。塾生に近い世代として、寄り添った指導を行っている。彼らも上の世代から教えられ、下の世代を教えることによる気づきは多い。こうして世代をまたいで技が受け継がれていく。大工志塾では「ただの職人ではなく、棟梁になれ」と教えている。技術と知識を磨くだけでなく、人をまとめる技量と経営感覚を身につけるように導く。若い指導者達の姿は、塾生にとって独立後のイメージと重なる。

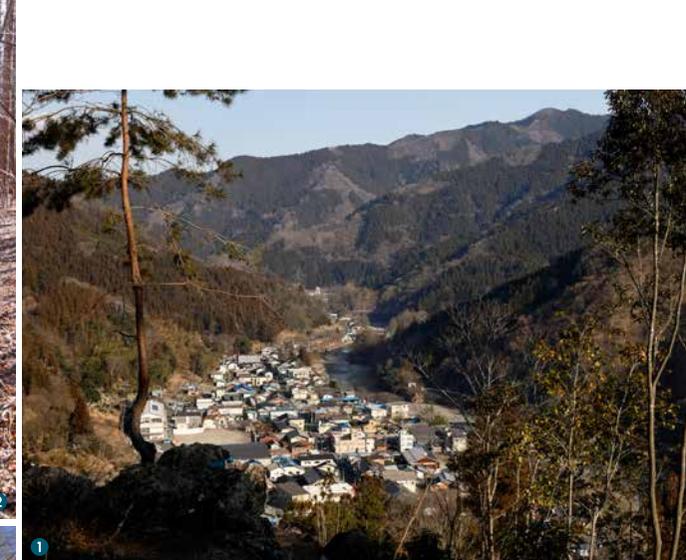
大工育成塾の卒業生は約600人。それに加えて、大工志塾から毎年30人ほどの大工が巣立っていく。伝統構法の大勢力ができていく。木の特性を手仕事で活かす、日本古来のすぐれた建築が見直される流れが形成されてきた。



第2期の塾生達が課題として建てた五重塔。神流町を見下ろす丘の上に建つ。塾生達は3年かけて伝統構法を学ぶ。

CONTACT INFORMATION

大工志塾事務局
東京都新宿区四谷1-13 虎ノ門実業会館四谷ビル1階
一般財団法人住宅産業研修財団内
tel.03-6273-2585
<http://www.jaho.or.jp/project>



- ① 五重塔から一望する神流町の中心部。川沿いのわずかな平地に市街地が細長く伸びる。山の中腹にも集落が点在する。
- ② 標高1000メートルの山で、樹齢50年生ほどのカラマツを伐る神流川森林組合職員。カラマツは梁に使えることを大工に教わった。
- ③ プロセッサで枝払いをして造材。集積作業まで行う。町内には急峻な山が多く、高性能林業機械の導入が難しいとのことだ。
- ④ 組合職員は、「工務店に直接販売するようになって、造材が変わった」という。曲がりのある根元の部分も活かすようになった。

材の価値を高める取り組みに挑戦する林業

照りつける8月の日差しの下、10数人の若い大工が掛矢を手をずらりと並ぶ。息を合わせてかけ声を揃え、桁を柱に一斉にたたき込む。彼らは大工志塾の塾生達だ。3年間のプログラムで大工棟梁に必要な技術と知識を学んでいる。大工志塾の前身は13期続いた大工育成塾だ。大工志塾になってからは3期目となった。1期目から神流町で年に2回の集合実技研修を行っている。これまでに制作したものは合掌造りの屋根部分、三重塔、四阿、五重塔など。年々難易度が高まっている。1期生の修了制作は、板倉構法で建てる神流川森林組合の職員住宅だ。これらの課題にはすべて神流町の木材が使われる。町に製材所はないので、大工志塾を運営する一般財団法人が簡易製材機を購入し、自分達で挽くようになった。こうすれば長物の入手も可能だ。製材の実習も研修の一環だ。

神流町は町の面積の88・3%を林野が占める。神流川沿いに開けたわずかな平地を見下ろすように、1000m級の山が連なる。こんなにやく、養蚕、石材がかつての名産品。どれも時代の波に取り残されてしまった。そして木材。主幹産業

でありながら、森林組合は赤字が続いていた。「神流の木は標高800m以上だと目が詰まっていて質が良いんです。しかし、急峻で出材が難しい」と、神流町町長で森林組合長を兼ねる田村利男さんは言う。搬出しやすい場所の木を伐って原木市場に運んでも、その多くはC材D材としてしか値がつかなかったという。利益が出ずに組合職員の給与を下げたら人が去って行った。風向きが変わったのは、3年間に田村さんが組合長に就任してからだ。林業機械を導入し、民間の労働力も動員して標高の高い場所にある町有林を伐った。効率的な施業で、就任2年目に黒字化した。田村さんの先見の明は、大工志塾との連携にも発揮されている。財団の理事長を通して、神流町で研修を行う依頼があった時、勝算があったという。神流町は人口1640人の半分を高齢者が占める。当然、税収も低い。田村町長は「この町では、今ここにあるものの価値を高めていくことが課題です。大工志塾の受け入れを決めた時に、神流の木と結びつく」と直感的に思いました。結果は町長の思惑を超えた。町に来るのは塾生だけではない。すでに独立した

は、大工志塾との連携にも発揮されている。財団の理事長を通して、神流町で研修を行う依頼があった時、勝算があったという。神流町は人口1640人の半分を高齢者が占める。当然、税収も低い。田村町長は「この町では、今ここにあるものの価値を高めていくことが課題です。大工志塾の受け入れを決めた時に、神流の木と結びつく」と直感的に思いました。結果は町長の思惑を超えた。町に来るは塾生だけではない。すでに独立した